

近代酒造業における本社工場会計制度 －最新醸造簿記(1920)と灘酒造家の一次史料より－

日本簿記学会第40回全国大会
会場: 神戸大学 日時: 2024年9月1日(日)

本報告は, ファミリービジネス研究教育センター(神戸大学大学院経営学研究科内)の助成を受けた研究成果の一部である。

中村学園大学 土井貴之
takayuki.doi@nakamura-u.ac.jp

報告の流れ

- I 研究概要(先行研究をふまえて)
- II 岡村[1920]の概要と考察
- III 柴田家(灘酒造家)および柴田家史料の概要と考察
- IV 結論と今後の課題

研究概要

Research Question

近代期の酒造業における本社工場会計制度について、**理論**と**実践**の両面から明らかにする。

重要性

小倉[1959]など、近世期の商家における**本支店会計(報告)制度**の研究に対して、本報告では近代期の酒造業を対象とした**本社工場会計制度**の**日常的な取引**に**着目**して、当時の複式簿記の構造(のひとつ)を考察する。

研究方法

商法が制定された明治32(1899)年の灘酒造家一次史料と**大正9(1920)年の酒造簿記書(二次史料)**を用いた(簿記会計史)研究

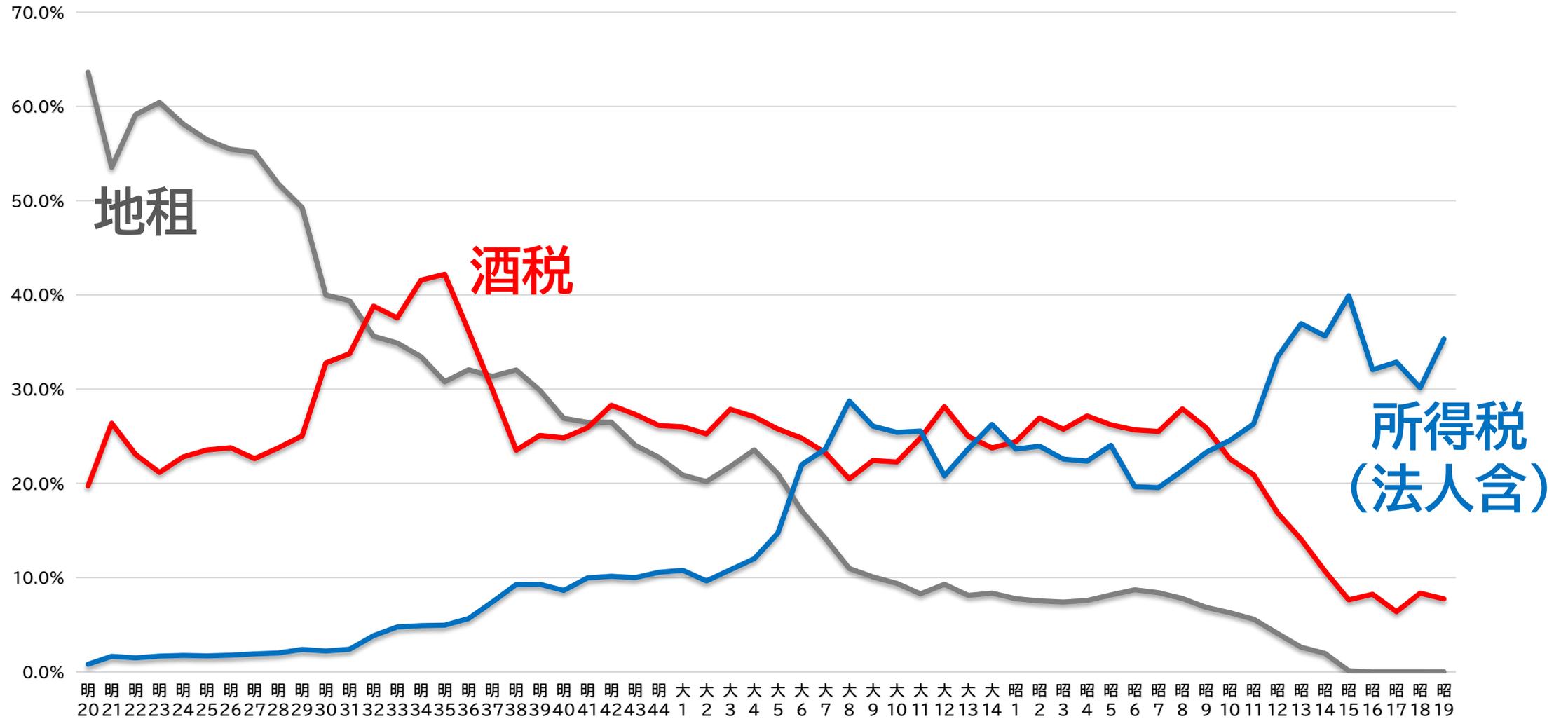
近世・近代期の酒造業研究

酒造業は在来産業の中でも中世から続く**伝統産業**で、日本各地で営まれてきた。また、近世期以降は江戸幕府の酒造政策や明治政府の酒税政策のもとで**近代期の酒造業は発展**した。(複式簿記導入研究に向いている?)

山田[1977]や青木[2003]によれば、酒造業は「土産的,土着的,地主的な性質」なことから日本各地で営まれていたこともあり、**酒造業を対象とした研究が様々な分野**で行われている。

松井[1977]や大島[2016]を参考にまとめると、「①雇用的側面,②技術的側面,③資本的側面」の研究から「④流通的側面,⑤産地的側面」へと展開しているとされるが、**会計的側面の研究**が言及されていない。

明治20年度～昭和19年度までの主な税収割合



出典: 明治財政史編集会(編)[1904],大蔵省(編)[1938]「歳入歳出決算表等」より筆者作成

近代期における複式(洋式)簿記導入過程

愛知県の綿織買次問屋で近代的簿記概念である資産と負債が1900年度に導入されていた(浦長瀬[1987])ことから、地方の大きな商家などでも和式帳合から複式簿記への切替えがスムーズに進んだ(宮本他[2007])

明治23年旧商法の制定, 大正10年以降の地場産業の近代化, 昭和初頭の西洋式簿記普及の機運とその後の「法人成り」を複式簿記の転換期としながら, 和式帳合は戦後の青色申告制度普及まで存在した(小島編[1979])

兼松商店(兼松株式会社)の明治23(1890年の帳簿係が「現金主義仕訳に準じるシステム」を採用していたが, 次の帳簿係が昭和初年まで続く「シャンド・システム」に変更した背景には, 「近代化=合理化」ではなく, 雇用された帳簿係の複式簿記の技術に依拠(山地・藤村[2010])

近代期の酒造業における複式簿記導入過程

日本固有の簿記法(和式帳合)から複式簿記に切り替えられた時期を社史等の資料から考察している西川登[1996]は, 大倉恒吉商店(現在の**月桂冠**)経営者の**大倉恒吉が原価や損益の計算を明瞭にするため, 明治20年代に複式簿記を導入したと述べている。**

山地・藤村[2008]は, 小西新右衛門家(現在の**小西酒造**)において, 当時の**経営者の家長が主導した鉄道や銀行という未知の新事業部門と伝統的な酒造部門を分離するため, 言い換えると, 家長の「個人事業」と小西家(イエ)の「家業」との区分を明確に切り離した組織構造の変革の象徴として, 複式簿記導入の議論が出てきたと主張している。**

→ 両研究において,**近代期の酒造業が複式簿記を導入したことを明らかにしているものの, その複式簿記の構造にまで言及していない**

近代期の簿記書

岩田他[2009]によれば、明治期の商法の制定・施行が**簿記書**の出版に影響を与えたとされる。

当時の簿記書を対象とした主な研究

銀行業・商業: 西川孝治郎[1971,1982]

津村[2007a;2007b;2009;2014]

工業: 建部[2003;2011]・岡田[2015]

農業: 工藤[2012;2014]

+ 酒造業: 土井・清水[2022],土井[2023a;2023b]

→ 近代期の酒造業が導入した可能性のある複式簿記の構造を**理論的に明らかにしてきたが**,**本報告では実務的な側面からも本社工場会計制度に着目して考察**(所得税よりも前から納付していた酒税の会計記録とその役割については,昨年度の全国大会で発表済)

近世期の本支店会計(報告)制度

小倉[1959]は、江州(滋賀県)の**中井家**が仙台・京都・大阪などの各地にある支店を計算的に管理するために、現在の計算構造とは違うものの本支店会計制度が発達したとしている。具体的には、享保19(1734)年以降の仙台支店とその枝店と本家の**本支店合併の貸借対照表**が作成されていた。

西川登[1986]は、「『本支店会計』という用語法も、必ずしも正確な表現とはいえない。さて、**ここでの対象資料は報告書類**であり、**日常取引を記録した帳簿資料**や**店内限りの会計記録に触れない**」西川[1986,110]としながらも、文政期(1818~1831年)における**三井家**の京都本店と3支店および2傘下店とを結合した**本支店合併計算方法**を明らかにした。

→ 両研究とも、**支店から業績の報告**を受け、**本店が本支店合併の決算報告書**を作成する過程に着目しているが、**本報告では、岡村[1920]**と**柴田家史料**から**本社(醸造部門)**と**工場(販売部門)**の**日常取引**に着目

報告の流れ

- I 研究概要(先行研究をふまえて)
- II 岡村[1920]の概要と考察**
- III 柴田家(灘酒造家)および柴田家史料の概要と考察
- IV 結論と今後の課題

岡村[1920]の概要

「本書は**醸造試験所**講習に於て講述したるものを訂正して上梓した・・・」岡村[1920,凡例1]

公益財団法人日本醸造協会発行の『日本醸造協会雑誌』23(4)～26(2)には(1928年から1931年),岡村の論文「醸造資料複式簿記」が掲載されているが,そこでは**醸造試験所講師**と記されている。

醸造試験所(現在の独立行政法人酒類総合研究所)は,当時の酒造方法を改良発展させるため(財源確保),大蔵省管轄で明治37(1904)年に設立されたが,**酒造業に適した簿記の講習会も行われていた**ことが示唆される。

岡村[1920]の参考文献

「本書中に参照引用したる主なる著書名及雑誌」岡村[1920,凡例1-2]

吉田良三著

『近世簿記精義・工業簿記』

東爽五郎著

『新案詳解商業簿記』

佐野善作著

『商業簿記教科書』

鹿野清次郎著

『計理学提要』

田尻常雄 古館市太郎共著

『英文簿記教科書』

松村吉則講述

『簿記学』

カードシステム講習会発行

『カード式簿記講習書』

日本会計学会発行

『会計』

国家学会発行

『国家学会雑誌』

實文館発行

『国民経済雑誌』

岡村[1920,67-72]の本社工場会計制度①

1 現金10,000円を元入して営業を始む

営業部(本社)

(借) 現金	10,000	(貸) 資本金	10,000
--------	--------	---------	--------

工場

(借) 仕訳を要せず	(貸)
------------	-----

2 現金5,000円を以て原料品を買入る

営業部(本社)

(借) 工場勘定	5,000	(貸) 現金	5,000
----------	-------	--------	-------

工場

(借) 原料	5,000	(貸) 営業部	5,000
--------	-------	---------	-------

岡村[1920,67-72]の本社工場会計制度②

3 右原料を仕込に使用する

営業部(本社)

(借) 仕訳を要せず (貸)

工場

(借) 醸造勘定 5,000 (貸) 原料 5,000

4 右仕込に関する労銀1,000円を現金にて支払う

営業部(本社)

(借) 工場勘定 1,000 (貸) 現金 5,000

工場

(借) 労銀 1,000 (貸) 営業部 5,000

岡村[1920,67-72]の本社工場会計制度③

5 工場諸費500円現金にて支払う

営業部(本社)

(借) 工場勘定	500	(貸) 現金	500
----------	-----	--------	-----

工場

(借) 工場費	500	(貸) 営業部	500
---------	-----	---------	-----

6 労銀及工場諸費は之を醸造勘定に組入る

営業部(本社)

(借) 仕訳を要せず		(貸)	
------------	--	-----	--

工場

(借) 醸造勘定	1,500	(貸) 諸口	
		労銀	1,000
		工場費	500

岡村[1920,67-72]の本社工場会計制度④

7 醸造完了につき醸造勘定を製品勘定に振替を為す

本社に製品倉庫がない設定

営業部(本社)

(借) 仕訳を要せず (貸)

工場

(借) 製品勘定 6,500 (貸) 醸造勘定 6,500 ★1

8 製品を売渡し此の代金10,000円を現金にて受入る

営業部(本社)

(借) 現金 10,000 (貸) 工場勘定 10,000

工場

(借) 営業部 10,000 (貸) 製品※ 10,000 ★2

※ 製品「勘定」が抜けているが本文まま(総記法で記帳)

★1 製品(清酒)完成時の処理

「工業簿記の進化レベルはいかに、またいかなる勘定によって内部価値移転を記録したかにあり、**製造勘定の完成は内部価値移転を期間費用として記録するシステム**が完成したことを意味する」 建部[2003,67]

第1段階	商業簿記を工業に応用した段階(製造勘定の設定なし)
第2段階	混合勘定(借方:原価・貸方:原価+利益) としての製造勘定
第3段階	純粹勘定(借方も貸方も原価) としての製造勘定

出典:建部[2003,65]より発表者作成

「製造業の会計という概念は希薄で、生産した財を外部へ販売したように、**利益を加算して商品勘定へ振り替えている**」建部[2003,44-45]

→ **酒造業においては、経営者と杜氏との「疑似的な内部請負制度」**関
[2009,45]を考慮すると、**杜氏から買い取っていた価格で計上?**

酒造簿記書の分類(建部[2003]を参考に)

第1段階	商業簿記を工業に応用した段階	曾根[1903]
第2段階	混合勘定としての製造勘定	亀井[1890a;1890b] 西田[1903]
第3段階	純粹勘定としての製造勘定	岡村[1920]

出典:土井・清水[2022],土井[2023a;2023b]を参考に発表者作成

→ 明治32(1899)年の柴田家では原価とは違う金額(詳細は後述)で酒が評価され,ほぼ同年代の亀井[1890a;1890b]においても「相場見積高」の約8割で酒が評価されている点から,当時の柴田家も第2段階?

★2 製品(清酒)販売時の処理

製品売上高金一万円也此製造原価金七千円也

(借)	売上原価勘定	7,000	(貸)	製品勘定	7,000
	売掛代金勘定	10,000		売上勘定	10,000

売上製品戻り高金千円也此原価金七百元也

(借)	売上勘定	1,000	(貸)	売掛代金勘定	1,000
	製品勘定	700		売上原価勘定	700

売上原価勘定残高を売上勘定に振替**六千**円也

(借)	売上勘定	6,100	(貸)	売上原価勘定	6,100
-----	------	-------	-----	--------	-------

出典: 岡村[1920,30-33]より筆者作成

→ 現在の**売上原価対立法**に相当する記帳方法の解説もある

売上勘定にて「 $¥10,000 - ¥1,000 - ¥6,300 = \text{利益} ¥2,700$ 」と計算するつもりが、**誤って¥6,100と記載?**

報告の流れ

- I 研究概要(先行研究をふまえて)
- II 岡村[1920]の概要と考察
- III 柴田家(灘酒造家)および柴田家史料の概要と考察**
- IV 結論と今後の課題

柴田家および柴田家史料の概要

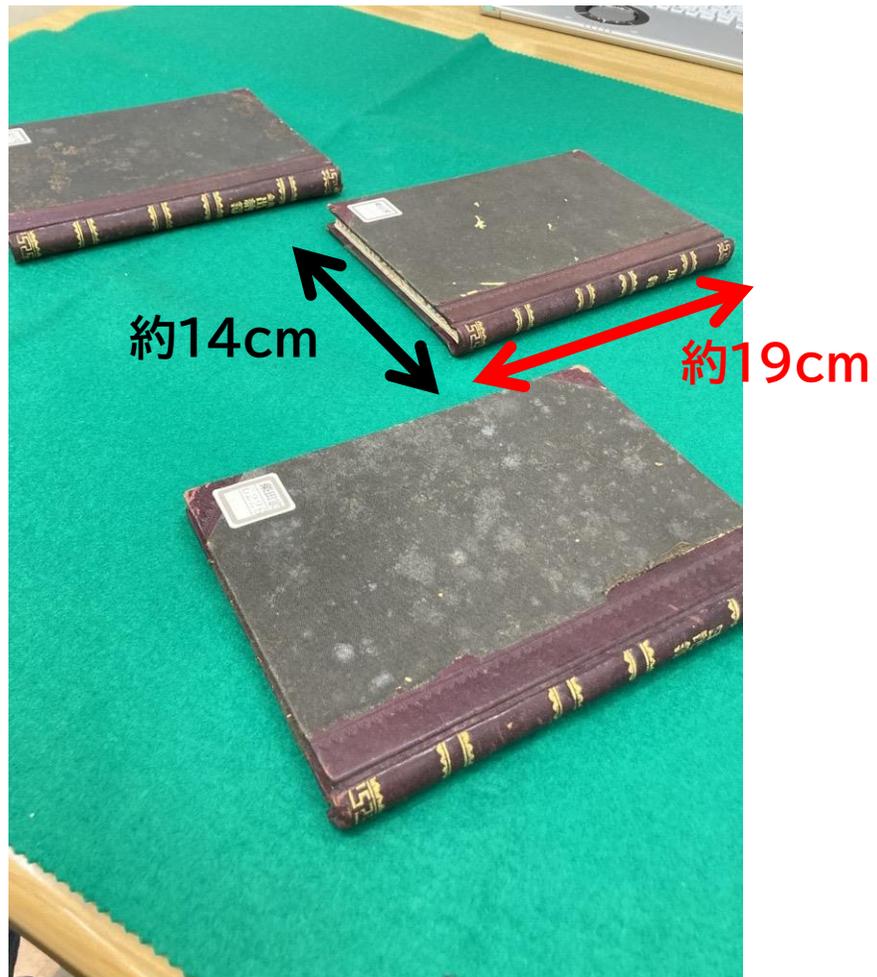
柴田家は菟原郡新在家村(現, 兵庫県神戸市灘区新在家南町3丁目)にて元文元(1736)年に酒造業を開業し, 昭和4(1929)年に廃業するまでの約200年間, **酒造業**を営んできた。

柴田家史料『29年期醸酒雑記』と桜井[1981, 59-60]による**明治28(1895)年清酒生産量割合**を参考にすると, 当時の柴田家は上位5%となる**大規模酒造家**(清酒生産高1,000石以上)に分類される。

柴田家史料は**神戸市文書館**(兵庫県神戸市中央区熊内町)にて保存されている。2024年8月9日現在, **31,266点**の史料が登録され, **酒造業だけでなく大名貸など多岐に渡る史料**がある。本報告では酒造業のうち, **明治32(1899)年の史料(日記簿・原簿・金銭出納簿)**を対象とした。

(醸造部門の史料については, 昨年度の全国大会で報告済)

本報告で対象とする柴田家史料①

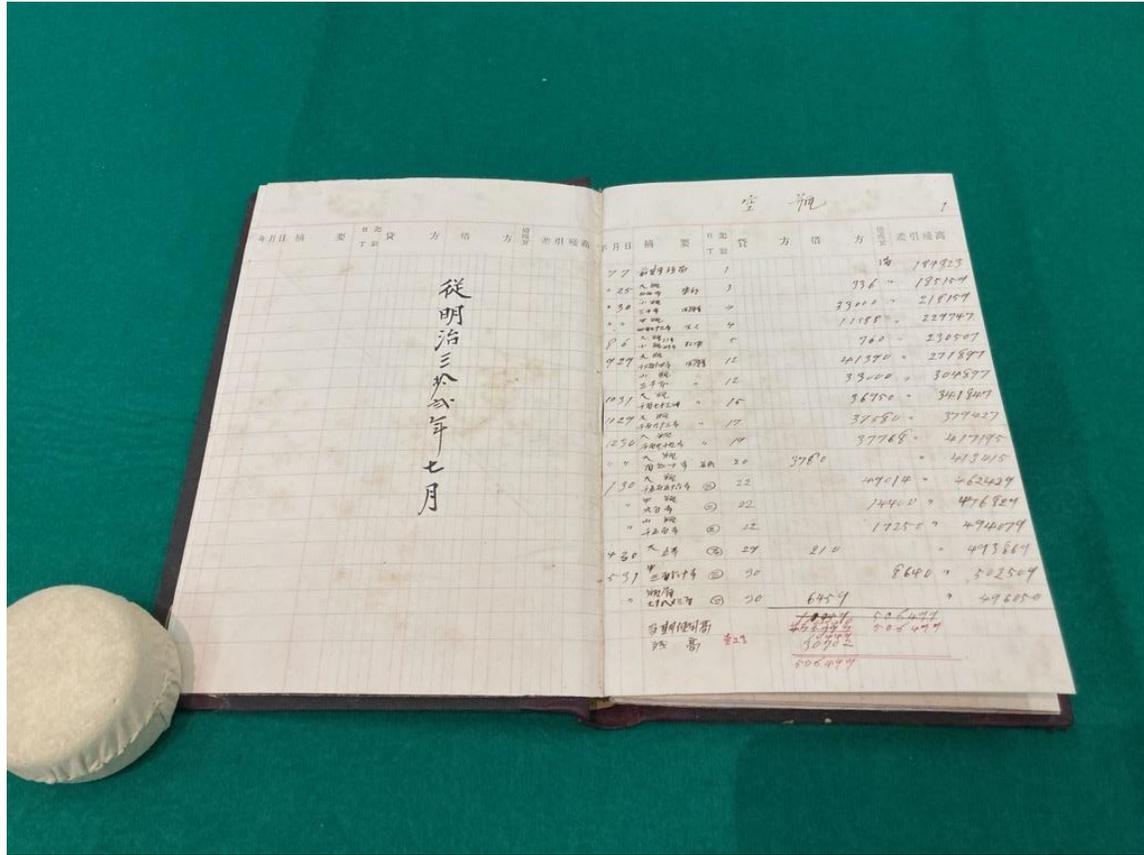


An open diary with handwritten entries. The left page has vertical text: 從明治三十二年七月. The right page contains a table with columns for date, item, and amount.

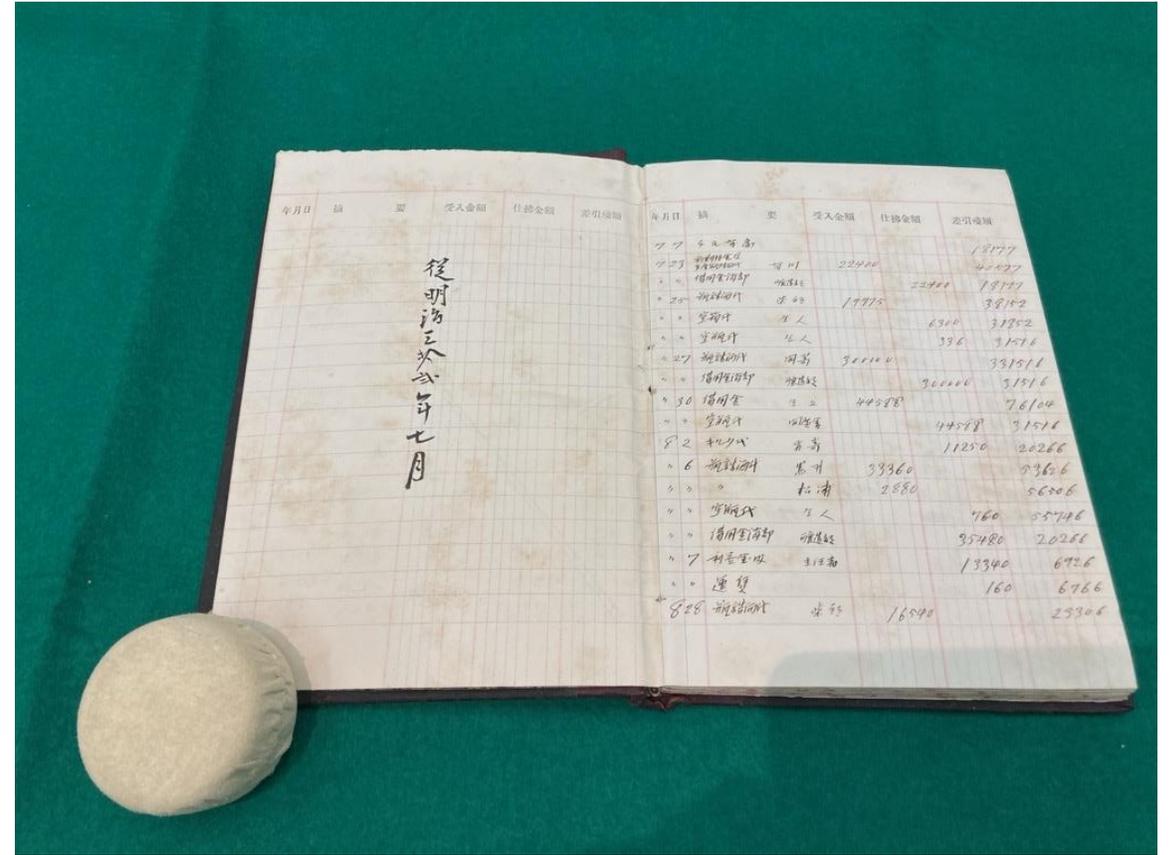
年月日	摘要	金額
7/7	寄物	
1	宝飾	124.823
2	手紙、口金、口金	55.171
3	レター	75.573
4	包	33.220
5	箱	44.260
6	銅鑄	1.350
7	香金	12.320
	計	379.057
8	前借書校、筆藏指書	10200
9	宛封用紙 四二〇 21797	107588
	貸所金 印刷用紙香紙類	
10	柴田和松	63.275
11	針子取書	5.700
12	黒井子	13.360
13	杉浦和太郎	2.880
14	岡崎和太郎	680.100

出典:柴田家6226『明治32年度日記簿』 筆者撮影

本報告で対象とする柴田家史料②



柴田家6225『明治32年度原簿』筆者撮影



柴田家6224『明治32年度金銭出納簿』筆者撮影

柴田家における記帳方法

1 すべての取引が日記簿に記録

2 原簿や金銭出納簿に記帳

原簿の勘定科目に直記(仕訳帳が発見されていない可能性も?)

原簿には**現金勘定**と**売上高を計上する勘定科目**(現在の売上勘定や醸造簿記書の製品[清酒]勘定など)**の設定がない**

→ すべての現金取引が金銭出納簿に記帳

→ 決算時の精算勘定(原簿の最後)に計上されている「**本期売立高**」は掛販売・積送販売に関する人名勘定の借方金額の合計と一致

→ 原簿では、すべての勘定科目において、増加したら借方・減少したら貸方に計上(**負債として記載されていた醸造部ヨリ借入金勘定も原簿では同じ動きだが、金銭出納簿では減少は借方・増加は貸方に計上**)

原簿に設定された勘定科目と丁数の一覧

勘定科目	原簿丁数	勘定科目	原簿丁数	勘定科目	原簿丁数
空瓶	1	キルク 口金 ゴム	2	レツテル	3
苞	4	空箱	5	箱縄	6
帯金	7	箱詰器械, 籠, 壓搾器	8	瓶詰用酒	9
柴田邦松	10,28,32,37	針谷為吉	11	黒井夕子	12,24
松浦権兵衛	13	岡崎洋酒店	14,31	丸三商店	15,33
有川磯次	16	醸造部ヨリ借入金	17,27,36	醸造部	18
仲居文吉	19	主任者	20,38	運賃	21
雑費	22,34	割引	23	渚支店	25
渚本店	26	松尾仲次	29	安田直治郎	30
植松茂	35	塩谷任三郎	39	樽代	40

出典: 柴田家6225『原簿』より筆者作成

取引例① 開始仕訳(1)

日記簿

1

仕訳 原簿 丁数	年月日		摘 要	金 員
	7	7	有物	
1			空瓶	184.823
			(省 略)	
			負債	
17			醸造部ヨリ借入金	1,131.983
			(省 略)	

原 簿

醸造部ヨリ借入金

17

年月日		摘 要	日記 丁数	貸 方	借 方	借 或 貸	差引残高
7	7	前期残額					1,131.983

取引例① 開始仕訳(2)

日記簿において、現在の開始仕訳のような記録

- (1)空瓶勘定から(16)有川磯次勘定までを有物(資産)
(17)醸造部ヨリ借入金勘定を負債と記載(債務と認識)
ただし、資産と負債の差額についての言及はない
- 「仕訳丁数」欄が「原簿丁数」欄に訂正されている
(仕訳帳を活用していなかった?)

原簿において、貸方と借方の位置が現在とは逆

- (1)空瓶勘定から(16)有川磯次勘定までの残高欄は(ほとんど)借
(17)醸造部ヨリ借入金勘定の残高については言及ないが、1つ目の
取引時の残高欄に「借」と記載(翌年度の開始記入では貸方残高)

取引例② 酒の自家消費(1)

日記簿

2

住訳 原簿 丁数	年月日		摘 要	金 員
18	7	12	醸造部へ掛二テ売渡ス 政宗大瓶 三本 @.165	.495

原 簿

醸造部

18

年月日		摘 要	日記 丁数	貸 方	借 方	借 或 貸	差引残高
7	12	大瓶 三本	2		.495	借	.495

取引例② 酒の自家消費(2)

柴田家販売部門における原簿での処理

(借) 醸造部 0.495 (貸)

→ 醸造部(職人たちの自家消費)への貸し付け(債権)として計上

原簿においては、**貸方の勘定科目が計上されていない**

→ 単価は販売単価(@.180)より安い@.165

原価でもない可能性が高く、従業員割引の金額と推測

貸方に(製品勘定等が)未計上の理由は不明

補助簿のような「酒類蔵出帳(昨年度発表済)」で管理していた?

岡村[1920]を参考にした場合の処理案

(借) 醸造部 0.495 (貸) 製品 0.495

取引例③ 現金販売および掛代金回収(1)

日記簿

3

仕訳 原簿 丁数	年月日		摘 要	金 員
16	7	23	有川磯次ヨリ銀行小切手ヲ以テ前期残金及当度 注文小瓶壺函代ト合計シテ送附シ来ル	
1				
				前期残金 15.200
				当度注文分 7.200
17	〃	〃	借入金消却トシテ醸造部へ渡ス	22.400
原 簿 有川磯次				16

年月日		摘 要	日記 丁数	貸 方	借 方	借 或 貸	差引残高
7	7	前期残額					15.200
〃	23	現金	3	22.400		貸	7.200
〃	25	小瓶百四十本入壺函	3		7.200		

取引例③ 現金販売および掛代金回収(2)

原簿

醸造部ヨリ借入金

17

年月日	摘要	日記 丁数	貸方	借方	借 或 貸	差引残高
7 7	前期残額					1,131.983
// 23	消却	3	22.400		借	1,109.583

金銭出納簿

1

年月日	摘要	受入金額	仕払金額	差引残額
7 7	手元有高			18.177
7 23	前期残金及当度瓶詰酒代 有川	22.400		40.577
// //	借入金消却 醸造部		22.400	18.177

※ 原簿(現金/醸造部ヨリ借入金)と金銭出納簿(醸造部ヨリ借入金/現金)で仕訳が逆に記帳

取引例③ 現金販売および掛代金回収(3)

柴田家販売部門における原簿での処理

(借) 有川磯次	7.200	(貸) 有川磯次	22.400
		醸造部ヨリ借入金	22.400

→ 負債と記載していた醸造部ヨリ借入金勘定だが、貸方に計上
ただし、金銭出納簿では…

(借) 現金	22.400	(貸) 有川磯次	22.400
醸造部ヨリ借入金	22.400	現金	22.400

→ 様式は整っているものの、帳簿系の複式簿記技術が垣間見える

岡村[1920]を参考にした場合の処理案

(借) 醸造部ヨリ借入金	22.400	(貸) 有川磯次	15.200
		製品	7.200

取引例④ 営業に関する諸費用支払い(1)

日記簿

7

住訳 原簿 丁数	年月日		摘 要	金 員
17	8	31	醸造部ヨリ借用ス	135.380
21	//	//	毎々丸へ運賃払渡ス	.470
22	//	//	大井利八へ釘代払渡ス	.600
3	//	//	レッテル代天狗堂へ払渡ス	
			大瓶用壱万組 四拾三円	
			黒井名義入小瓶用 五千百枚 @649	
			三円三拾壱銭	
			柴田直詰章 五千百枚 @649	
			三円三拾壱銭	
			合計	49.620
2	//	//	竹村安太郎へ口金及コム代払渡ス	
2			口金 四千四百個 @6 廿六円四拾銭	

取引例④ 営業に関する諸費用支払い(2)

日記簿

8

住訳 原簿 丁数	年月日		摘 要	金 員
2			ゴム 四千五百個 @35 拾五円七拾五銭	
			合計	42.150
22	8	31	手伝賃喜代松へ払渡ス	.700
	//	//	福田辰造へ苞及箱縄代払渡ス	
4			小苞壹万個 @16 拾六円	
6			箱縄 二千八百尋 @30 八円四十銭	
			合計	24.400
21	//	//	花木伊作へ運賃払渡ス	6.340
5	//	//	全人へ空箱代払渡ス	
			空箱 三拾七個 @30	11.100

取引例④ 営業に関する諸費用支払い(3)

原簿
キルク 口金 ゴム

2

年月日	摘要	日記 丁数	貸方	借方	借 或 貸	差引残高
			(省 略)			
8 31	口金四千四百個	5		26.400	借	72.841
// //	ゴム四千五百個	5		15.750	//	88.591

レツテル

3

年月日	摘要	日記 丁数	貸方	借方	借 或 貸	差引残高
7 7	前期残高	1			借	75.593
8 31	天狗堂	7		49.620	//	125.213

取引例④ 営業に関する諸費用支払い(4)

金銭出納簿

2

年月日		摘要	受入金額 (省略)	仕払金額	差引残額
8	31	借入金 醸造部	135.380		140.146
//	//	運賃 毎々丸		.470	139.676
//	//	釘代 大井利八		.600	139.076
//	//	レッテル代 天狗屋		49.620	89.456
//	//	口金代 竹村		42.150	47.306
//	//	手伝賃 喜代松		.700	46.606
//	//	苞代 福田		24.400	22.206
//	//	運賃 伊作		6.340	15.866
//	//	空箱代 伊作		11.100	4.766

取引例④ 営業に関する諸費用支払い(5)

柴田家販売部門における原簿での処理

(借)	現金	135.380	(貸)	醸造部ヨリ借入金	135.380
	口金	26.400		現金	26.400
	(省略)			(省略)	
	空箱	11.100		現金	11.100

→ 現金は原簿に未記帳だが、金銭出納簿から推測すると、いったん醸造部から現金を受け取り、各方面へ現金を払い出し(ているように?)

岡村[1920]を参考にした場合の処理案

(借)	口金	26.400	(貸)	醸造部ヨリ借入金	135.380
	(省略)				
	空箱	11.100			

取引例⑤ 醸造部勘定と醸造部ヨリ借入金勘定の調整(1)

原簿

43

年月日	摘要	日記 丁数	貸方	借方	借 或 貸	差引残高
	本期酒代					
		南	拾壺太 @	185.- 203.500		
		本	片馬 @	185.- 7.250		
			(省略)	(省略)		
		本	三太片馬 @	220.- 77.000		
				合 計		a 1,100.750
	樽代					
		赤身	弍拾五太片馬 @	25.- 63.750		
		甲付	片馬	1.750		
				合 計		b 65.500
	借入金前期償却残リ					c 1,131.983

取引例⑤ 醸造部勘定と醸造部ヨリ借入金勘定の調整(2)

原簿

44

年月日	摘要	日記 丁数	貸方	借方	借 或 貸	差引残高
	本期借入高					d 620.060
				合計		e 2,918.293
	内					
	本期償却高					f 2,768,730
			式拾六太 @7,-			g 18.200
				合計		h 2,786.930
	差引償却残	即借	トナル			i 131.363

取引例⑤ 醸造部勘定と醸造部ヨリ借入金勘定の調整(3)

醸造部勘定と醸造部ヨリ借入金勘定を統合した勘定

f	2,768.730	c 前期繰越	1,131.983
g	18.200	d	620.060
i 次期繰越	131.363	a	1,100.750
		b	65.500
e	<u>2,918,293</u>	e	<u>2,918,293</u>

柴田家では、本社機能のある醸造部に対する**債権**としての**醸造部勘定**と、**債務**としての**醸造部ヨリ借入金勘定**を**区別**して設定し、醸造部ヨリ借入金勘定の増減について原簿では貸借を逆に記帳してしまい、かつ、期中において両勘定の記帳が**混在**してしまうものの、原簿に記載した調整手続きにおいて、次期繰越の金額は現在の会計処理と一致させている

取引例⑤ 醸造部勘定と醸造部ヨリ借入金勘定の調整(4)

a 当期完成高のうち販売部門が引き受けた酒 ¥1,100.750

【内訳】 本蔵:¥406.050 南蔵:¥694.700

(借)	製品あ(南)	203.500	(貸)	醸造部ヨリ借入金	1,100.750
	製品あ(本)	9.250			
	(省略)				
	製品か(本)	77.000			

単価から推測すると6種類の酒が製造・販売

岡村[1920]のように、製品(原価)の引き受けの都度ではなく、柴田家では決算時に一括(原価とは違う金額[当時の酒税率などから推測])で計上

b 決算時に判明した修正仕訳

(借)	現金	65.500	(貸)	醸造部ヨリ借入金	65.500
	樽代	65.500		現金	65.500

取引例⑤ 醸造部勘定と醸造部ヨリ借入金勘定の調整(5)

c 醸造部ヨリ借入金勘定の前期繰越高 ¥1,131.983

d 醸造部ヨリ借入金勘定の期中増加額 ¥620.060

(原簿では、醸造部ヨリ借入金勘定の借方合計)

e a~dの合計(現在の本社勘定の貸方合計に相当)

f 醸造部ヨリ借入金勘定の期中減少額 ¥1,623.085 と、

(原簿では、醸造部ヨリ借入金勘定の貸方合計)

醸造部勘定の期中増加額 ¥1,145.645 の合計¥2,768.730

g 決算時に判明した修正仕訳

(借) 醸造部	18.200	(貸) 樽代	18.200
---------	--------	--------	--------

h fとgの合計(現在の本社勘定の借方合計に相当)

i eとgの差額(現在の本社勘定の貸方残高に相当) → 翌期の開始残高

報告の流れ

- I 研究概要(先行研究をふまえて)
- II 岡村[1920]の概要と考察
- III 柴田家(灘酒造家)および柴田家史料の概要と考察
- IV 結論と今後の課題**

結論①

1 近代酒造業が導入した複式簿記(西川登[1996];山地・藤村[2008])の(ひとつとして)本社工場会計制度を理論と実践の両面から考察

(1) 本社機能のある醸造部門と販売部門との日常的な取引の処理

※ 小倉[1959]などの本支店会計(報告)制度

(2) 製品勘定の記帳方法として、岡村[1920]は総記法(別頁では売上原価対立法)が、柴田家は総記法のような方法(?と売価)が採用

(3) 岡村[1920]では本社機能は営業部に設定されていたが、柴田家においては醸造部(工場)に本社機能が存在していた

(4) 柴田家では、醸造部勘定(醸造部への債権)と醸造部ヨリ借入金勘定(醸造部への債務)を区別していたものの、途中で混在し、決算時に相殺

(5) 共通している取引については、理論と実践の比較分析(次頁参照)

1899年の柴田家史料と岡村[1920]の比較分析①

原料品や諸経費などを支払うとき

柴田家

岡村[1920]

(借)	現金	xxx	(貸)	醸造部	xxx	(借)	原料など	xxx	(貸)	本社	xxx
	空瓶など	xxx		現金	xxx						

→ 柴田家では、本社機能のある醸造部へ月末に報告して、いったん現金を受け取って、その現金で支払っていた(実際にも?)

ただし、原簿に現金勘定がなく、金銭出納簿で現金の受け払いの記録が行われていた

※ 柴田家では、原料品などは棚卸計算法、諸経費は当期支払高が当期の費用として計上されていた

1899年の柴田家史料と岡村[1920]の比較分析②

完成した製品を引き受けたとき

柴田家

岡村[1920]

(借) 製品 xxx (貸) 醸造部 xxx (借) 製品 xxx (貸) 工場 xxx

→ 柴田家では、本社機能のある醸造部から販売部門が引き受けているが、その都度(原価)ではなく、決算時に一括(原価とは違う・売価より低い金額)して計上。(棚卸計算法で売上原価[に相当する額]を算定)

原価ではない理由は、当時の酒税率及び同年代の酒造簿記書より〇〇種類の酒が生産

岡村[1920]では、本社機能のある営業部に製品倉庫がなく、工場で製品を保管し、工場から販売先へ直送しているが、比較分析するために、営業部が工場から製品を受け取った場合の取引を記載(金額は原価)

1899年の柴田家史料と岡村[1920]の比較分析③

製品を売り渡したとき

柴田家

(借) 人名 xxx (貸)
現金 xxx
醸造部 xxx

岡村[1920]

(借) 営業部 xxx (貸) 製品 xxx
現金 xxx
現金 xxx

→ 柴田家の原簿には、売上高を計上する勘定科目(売上勘定や製品勘定など)の設定はなく、代金を現金で受け取ったとしても、売掛金に相当する人名勘定の借方にだけ売価で計上し、受け取った現金を本社機能のある醸造部へただちに送金(したように処理?)

岡村[1920]では、売上高を計上する方法として総記法が採用され、製品勘定の貸方に売価で計上(別頁には売上原価対立法の解説もあり)

結論②

2 「帳簿系の複式簿記技術」山地・藤村[2010]や当時の会計思考を確認

→ 原簿に現金勘定の設定がなく、金銭出納簿で記録・管理

(醸造部[本社]との間の現金取引を含む)

原簿に製品勘定の設定がないものの、売上高を計算

(製品が原価でなく原価とは違う金額・酒類蔵出帳で管理?)

当時の資産(有物)負債(債務)観

醸造部[本社]勘定と醸造部ヨリ借入金勘定の設定

(現在は本社に対する債権債務を記録する本社勘定に統合)

3 建部[2003,67]は、日本の工業簿記は実務よりも教育面からの展開が

早かったと指摘しているが、岡村[1920]や参考文献(吉田[1918])の

約20年前の柴田家史料から本社工場会計制度の萌芽を確認

→ 中世から続く酒造業の場合、実務の方が早かった可能性を示唆

今後の課題

1 当時の工業簿記書の考察

吉田[1919]など近代期の工業簿記書だけでなく,外国の文献も考察

2 当時の酒造簿記書の処理と柴田家の処理との比較分析

積送販売に関する処理

決算手続き(棚卸計算法・利益計算)

3 他年度との比較分析

原簿に明治29(1896)年から3期間の利益(6.342円・416.666円・244.501円)が記載されていることから,他年度との帳簿を比較

4 本社機能のある醸造部で用いられていた帳簿との考察

史料が欠落しているのか,整理中なのか不明

3と4については, JSPS科研費
(24K05219)の助成を受け調査中

史料および参考文献等①

【一次史料(神戸市文書館所蔵)】

柴田家6224,『金銭出納簿』。

柴田家6225,『原簿』。

柴田家6226,『日記簿』。

柴田家25242,『29年期醸酒雑記』。

【参考文献】

青木隆浩[2003],『近代酒造業の地域的展開』,吉川弘文館。

岩田康成・米田正巳・石塚一彌・井手健二[2009],「複式簿記の日本への導入とその影響」,『Fuji Business Review』第1号, 74-79頁。

浦長瀬隆[1987],「明治期綿織物問屋と店卸帳」,『名古屋学院大学論集 社会科学篇』第24巻第1号, 57-71頁。

岡田龍哉[2015],「明治期工業簿記理論における仕損費の把握」,『原価計算研究』第39号第2巻, 13-23頁。

岡村祐次[1920],『最新醸造簿記』, 日本醸造工業。

大蔵省(編)[1938],『明治大正財政史 第3巻』,財政経済学会。

大島朋剛[2016],「酒造業史研究における『伏見酒造組合資料』の利用可能性」,『京都大学経済資料センターニューズレター』No.2, pp.4-6。

小倉栄一郎[1959],「江州中井家の本支店会計法について」,『彦根論叢』第52号,40-60頁。

[1962],『江州中井家帖合の法』,ミネルヴァ書房。

亀井亮之[1890a],『実業応用醸造簿記学精理上中』,京都簿記学校。

[1890b],『実業応用醸造簿記学精理下』,京都簿記学校。

史料および参考文献等②

【参考文献】

工藤栄一郎[2012],「明治初期における農業簿記教科書の登場とその社会的意味」,『熊本学園商学論集』第17巻第1号, 41-61頁。

[2014],「明治初期における農業簿記教育導入時の問題点」,戸田龍介(編著)『農業発展に向けた簿記の役割—農業者のモデル別分析と提言—』中央経済社。

小島男佐夫編[1979],『体系近代会計学VI会計史および会計学史』,中央経済社。

神戸市教育委員会[1988],『神戸市文献史料第九巻 古文書調査報告』,文尚堂。

神戸市教育委員会[1989],『神戸市文献史料第十巻 古文書調査報告』,文尚堂。

桜井宏年[1981],『清酒業の歴史と産業組織の研究』,中央公論事業出版。

関千里[2009],「酒造業における作業組織の変化—南部杜氏集団による酒づくりの事例から—」,『プロジェクト研究』第5号, 43-54頁。

曾根純[1903],『実践醸造簿記新書』,内田書店。

建部宏明[2003],『日本原価計算理論形成史研究』,同文館出版。

———[2011],「原価計算文献年表—明治, 大正, 昭和(20年まで)—」,『経営経理研究』第91号, 209-236頁。

津村怜花[2007a],「明治初期の簿記書研究—福沢諭吉『帳合之法』に関する一考察—」,『六甲台論集』第54巻第1号, 101-118頁。

———[2007b],「明治初期の簿記書研究—『帳合之法』の果たした役割—」,『会計』第172巻第6号, 118-129頁。

———[2009],「『銀行簿記精法』(1873)に関する一考察」,『六甲台論集』第56巻第1号, 33-50頁。

———[2014],「和式帳合と複式簿記の輸入—江戸時代から明治時代にかけて—」,中野常男・清水泰洋(編著)(2014),『近代会計史入門』,同文館出版。

史料および参考文献等③

土井貴之・清水泰洋[2022],「明治期醸造業会計の研究－『実業応用醸造簿記学精理』(1890)に見る記録と酒造経営」,『国民経済雑誌』第225巻第2号,45-64頁。

土井貴之[2023a],「明治期清酒醸造業の問屋制家内工業的簿記」－『実践醸造簿記新書』(1903)から見る酒造経営の記録－.『流通科学研究』第22巻第2号,69-82頁。

[2023b],「三位一体酒造業体制における近代酒造業の酒造経営と酒税の管理－実地適用醸造簿記(1903)を用いた考察－」,『日本経営診断学会論集』第23巻,1-6頁。

[2024],「明治期酒造業固有の帳簿記録から見る酒造経営－灘酒造家の「酒類蔵出帳」と「酒類売上帳」の考察から－」,『流通科学研究』第23巻第2号,71-81頁。

西川孝治郎[1971],『日本簿記史談』,同文館出版。

[1982],『文献解題 日本簿記学生成史』,雄松堂書店。

西川登[1986],「文政期の三井越後屋呉服店の本支店会計報告制度」,『産業経理』第46巻第3号,109-118頁。

[1996],「社史に見る西洋式簿記の導入」,『商経論叢』,第31巻第3号,99-135頁。

西田助六[1903],『實地適用醸造簿記』,青木嵩山堂。

松井久美枝[1979],「伏見酒造業の展開過程－19世紀中期より20世紀初頭にかけて－」,『研究年報』第23号,77-100頁。

宮本又郎・阿部武司・宇田川勝・沢井実・橘川武郎[2007],『日本経営史〔新版〕－江戸時代から21世紀へ』,有斐閣。

明治財政史編集会(編)[1904],『明治財政史 第3巻』,丸善株式会社。

山地秀俊・藤村聡[2010],「明治の創設期における兼松商店の会計帳簿」,『国民経済雑誌』第201巻第5号,97-112頁。

山田盛太郎[1977],『日本資本主義分析』,岩波書店。